

地理教師 11 年の歩み

松 田 弘

ぼやぼやしているうちに、大学を卒業して11年になろうとしている。「10年一昔」というが、「新率です。よろしく。」という身勝手な時代は過ぎ去り、自分なりのアイデアを生かしての、教育実践をしなければならない、きびしい段階に達してしまった。走馬燈のごとく過ぎ去った11年間をふりかえてみると、まったく恥ずかしい試行錯誤の連続ではあったが、それでも過去の歴史のなかに、地理研究の足跡が残されているのに気づく。

大学を卒業してすぐ本校に就職してしばらくの間は、新米教師なるが故に、日々の慣れない学習指導に追いまわされて、地理の研究などする心の余裕はなかった。ただ、時間の余裕があれば、地理書を手当たりしだいむさぼり読んだものである。しかし、地理のどの分野を研究しようというはっきりした目的をもたなかったのも、今から考えるとずいぶん道草をしたような気もする時期であった。

仕事にも慣れてくると心の余裕もでた。情性に流れやすい現実の生活の脱脚と、地理への初志の貫徹は、そうなまやさしいものではなかった。その頃、一人、二人研究仲間ができて、その研究法について「ああだ、こうだ。」と論じ合っているうちに昼間の疲れも吹っ飛び、ただ奥深い永遠な真理の世界に吸い込まれていくのであった。また、学究生活は教育に対する見方や考え方をも変えていった。ややもすると、現象的感覚的な発想でことを処理する傾向が強い日々の教育実践と、広い視野から科学的に考察しようとする芽もでてきた。不思議なもので、ひとつの研究を曲りなりにもまとめると、必ず新しい研究課題が眼前に現われてくる。

郷土地理の研究を進めていくうちに、郷土だけを追求しては、視野がだんだん狭くなってしまおうような気がしてならない。やはり地理をやろうとする者は、そのフィールドを系統地理に求めるべきではなからうか。

それは、大変きびしいことではあるが、一生涯をかけて何物かを日本的な立場からまとめあげたとしたら、どんなにすばらしいことだろう。

とにかく、教育の諸活動に地理的センスを生かすように努力すれば、教師自身も、また教わる生徒にとっても、大きなプラスになるであろう。

この道11年になろうとしている昨今、やっと研究課題をもって日々の教育活動に精進することが、教師としての味わいのある日々を過ごすことができる唯一の方法であるということがわかりかけてきた。